

日本の被災地への募金セレモニーを実施

石 金楳

2011年3月19日午後2時、ハルピン市中国残留日本人孤児養父母連絡会は、ハルピン市赤十字会募金センターにおいて、日本の被災地への募金セレモニーを行ない、20数名がこの活動に参加した。

日本でマグニチュード9の大地震が起き、津波と放射能漏れを引き起こし、中国でも大きな関心を集め、メディアでは詳しい報道がされた。ハルピン市中国残留日本人孤児養父母連絡会は、地震の発生後ただちに日本にいる帰国者・遺児や友好団体と電話で連絡をとりお見舞いを伝えるとともに、連絡会の会員へ日本の被災地への募金を呼びかけ、会員全員からの賛同を得た。

募金セレモニーにおいて、84才になる日本人孤児の養母 李淑蘭さんはこう語った——日本の大地震発生後、テレビの報道を毎日見ては、夜は眠れなくなってしまった。私の日本人養女は被災地とは離れた大分県に住んでいたので少しほっとした。今日ここに来て、日本の被災地の方々にささやかながら募金をし、気持を表わすことによって、私も心のつかえがとれたと。中国残留日本人孤児の養母で高齢の沙秀清さんは、身体が不自由なため人に頼んで赤十字会に募金を届け、東京に住む娘さんは何事も変りなく母娘は電話が通じたと皆さんに伝えてもいた。

ハルピン市に住む日本人孤児の藤川合子さん、周桂芝さん、楊治国さんたちは口々に次の様に話された——中国に暮らす日本人孤児の一人として、この度の日本の不幸な大地震には心を痛め、毎日ニュースから目が離せず、さらに多くの方々が救出されることを願い、放射能漏れが速やかに止まることを願っている。中国政府に対しては、中国赤十字会による日本の被災地への人道主義的な援助に対して、衷心からの感激を表明したい、と。

遠く中国の深圳で医療関係に従事している李玉芳さんは、今回の活動を知ると、ご子息に託して赤十字会に行かせ、日本の被災地へと1000元を寄付された。彼女は電話で、1000元では足りないかも知れないが日本の被災者の助けになればと思う、被災地の人々が一日も早く普通の生活に戻れますように、と語っていた。

日本人残留婦人の子女の王重興さんや牛世光さんたちはこう語った——募金は私たちの心情を表わすひとつの方法であり、日本の方々には解って欲しい、世界中の人々があなたたちに眼差しをむけ、あなたたちの苦痛を分かち合い、日本の人々が一日も早く災害に打ち勝つことを期待しているということ。

連絡会の業務に参加されている吉林省長春市の孟慶国先生は、わざわざハルピン市まで来られて今回の活動に参加し、日本の被災地へと500元を寄付しこう話された——災害は人類共通の敵であり、日本の人々が必ずや困難に打ち勝ち、美しい郷里を再建されることを信じていると。

連絡会名誉会長の胡曉慧女史は、皆さんの来場に心からの感謝を表し、連絡会事務局長の石金楳は、帰国した日本人孤児、日本の友好団体、友好人士への電話慰問の様子を参加者に紹介した。

(森 一彦記)